



2018年5月、マリナーズ対エンゼルス試合前、握手するイチローと大谷。大谷はメジャー1年目、イチローはこの翌年を最後に現役引退した。写真=Getty Images

大谷翔平、 イチローの言葉

石田雄太（ベースボールジャーナリスト）

「不完全であるというのはいいになって。生きていく上で不完全だから進もうとできるわけです」

今年1月にアメリカ野球殿堂入りを果たしたイチローが、394人の記者投票のうち、わずか1票足りず満票選出にならなかったことに関して発した言葉だ。

MLB史上初の1シーズン50本塁打50盗塁を達成し、今季は二刀流復活への期待が高まる大谷翔平もまた、言葉を大切にしている野球人である。長年、両者へのインタビュを重ねてきたベースボールジャーナリストの石田雄太氏に、忘れられない名言とその背景について聞いた。

「石ころ」と「左腕」

——大谷選手とイチローさんに共通点があると思えば、どんなところでしょうか？

石田 まず、ネガティブな状況を受け入れ、それをポジティブな要素に変換する能力が高いことです。言葉を大事にする選手は多くいますが、自分の感覚や考えを豊富な語彙で、的確に言語化する能力はふたりとも突出しています。

——まずは大谷選手についてお聞きします。長年にわたり取材を継続されている中で、最も印象に残っている大谷選手の言葉は何ですか？

石田 すぐに思い浮かぶのは、メジャー1年目（2018年）、シーズン開幕前のアリゾナキャンプ中に聞いた言葉です。当然ですがメジャーではまだ何も結果を残していないので、「本当に二刀流なんてできるのか？」という懐疑的な空気がチーム内外に漂っていました。加えて、当時のピッチャー・大谷を苦しめていたのが、アメリカのボールです。日本のボールと比べて滑りやすく、肘への負担が大きい。その上、アリゾナ特有の乾燥した空気が、メジャー球への適応をより難しくしていました。そのボールにどうアジャストしようとしているのか、と尋ねた際、彼はこう答えたのです。

「変な話、そこに転がっている石ころを投げてくれと言われても、できるようにしないとイケないと思ってるんです」

この一言には、どんな環境であれ結果を出すしかない、という覚悟が込められているように感じました。同じ文脈で、1年目のシーズン中に右肘を痛め、翌シーズンは1年間投げられない状況にあったとき、彼はこう言いました。

「左腕も残っているのだから、どういう意味かと尋ねると、彼は笑いながらこう答えました。

「必死で練習すれば、左で投げられるようになると思うんです」

大谷選手は逆境に直面したとき、まずその状況を冷静に受け止め、次にどうアプローチすべきかを考えます。「石ころ」と「左腕」の話は、一見ユーモラスにも思えますが、彼のメンタリティを象徴しています。その根底には、努力次第で自分はいかようにでも成長できる、という強い自信と覚悟がある。それこそが、彼の本質的な強さなのだと感じます。

——想像を超えてくる言葉ですね。

石田 思わず「えっ!？」と聞き返してしまうことも何度かありました。特に印象的だったのが、「本当に、今年は（二刀流の）ラストチャンス

だったと思います」

という言葉です。大谷選手は3年目（20年）に投手復帰を果たしましたが、登板はわずか2試合にとどまりました。しかし翌シーズンには、打者として46本塁打、投手として9勝を挙げ、年間MVPを受賞するという歴史的な活躍を見せました。この言葉は、そのシーズン終盤の9月に彼が語ったものです。

大谷選手自身は「二刀流」という言葉を使いませんが、この21年に、もし投手として結果を残せなければ、「ふたつを続ける」という方針を見切りをつけられる可能性があるという空気を、チーム内で感じ取っていたと明かしてくれました。そのことに驚いたのは、思わず「えっ!？」今、何て言った？」と聞き返したのです。

インタビュアーとして、この「えっ!？」という反応を大切にしています。大谷選手もきっと、自分の言葉がぼくにとって予想外であったことを自覚していたはず。そこでもし、「なるほど。では次の質問ですが」と流していたら、ぼくはそこで見限られていたかもしれませぬ。それほど、「ラストチャンス」という言葉には重みがあり、彼の覚悟が込められていたのです。

アメリカでは、大谷選手の二刀流の才能を高く評価しつつも、できることなら打者に専念さ